

清き姫様

天神神楽

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

—— かつて守れなかった誓いを胸に、次は護りましょう。

私は彼の杯を交わせなかった。

しかし、だからこそ姫様に出会えた。

護りたいと思えた。

そして、再び貴女様に出会えた。

だから、今度は共に歩みましょう。

—— 私は貴方に出会えました。

そして、二度目の奇跡にも巡り逢えました。

……ですが、貴方は相変わらずの天然じごろ。

ああ、榛葉様。あまり貴方様の献身を他の女性に振り撒かないで下さいませ。でない、と、私、嫉妬のあまり龍になつてしまひそう。

でも、そんな鱗の生えた女にはなりたくはないのです。

私になりたいのは、華やかで穏やかで春の暖かな陽気のような女性なのです。

——そう。華の終わりに花の前で食べた桜のお餅。

あの時のように、心安らかな時を過ごせるような夫婦になりたいのです。

それなのに、異国の戦乙女だとか女騎士王だとか牛の頭領だとかましゆまろな後輩茄子だとか……もう!! 何人いるのですか!!

あまりふらふらなさないで下さいませ。私はまだ貴方様を《旦那様》と呼んだことすらないのですから。早く呼ばせて下さいませ。

貴方の《清姫》は、何度輪廻を巡ろうとも、貴方様のお側に参りますからね？

あい・して・まーす! と叫んだり、寝床には潜り込んだりしてきても、どこか狂いきれなかつたきよひーが、このお話のきよひーです。

目次

- 1 華の終わりに花の前で桜(はな)を

華の終わりに花の前で桜（はな）を

「榛葉（はしば）ー」

桜の花弁が敷物の如く舞う中、惜しみつつもそれを掃除していると、庭に可愛らしくも控えめな声が響く。

視線を上げると、こちらに向かつてぱたぱたと駆けてくる一人の少女。私は箒を桜の木に立て掛けて縁側に向かった。

「探しましたよ榛葉。もう、貴方がやる仕事ではないのに」

「ここにいと季節を感じられるのですよ。それより、いかがなさいましたか姫様？」
「お茶を淹れてもらいたかったのですが……それより榛葉。私のことは《清》と呼んで下さいと言っているのに、呼んでくれないのですか？」

そう言いながら《姫様》は、頬を膨らませる。そのお姿は大変愛らしいのだが、これをお父上——清次様に見られては晩酌の際にからかわれてしまうだろう。なので、直ちにその頬を萎ませて貰わなければならぬ。

「姫様は姫様です。私にとつて貴女様は守るべき姫。愛らしい姫様なのですよ」

「むう……ただ一言《清》と呼ばばいいのに。榛葉は頑固者です」

少しだが頬を萎ませて下さった姫様。なれば、姫様のお願い事を聞かなければならぬい。

「さ、お茶を淹れましょう。先日呉服屋の美夜様に茶葉を頂いたのです。これがまた大層美味でしたので、是非姫様にも飲んで頂きたかったのです」

「……………鈍感なのを喜ぶべきなのでしょうか」

「？」

はて、姫様はお茶がとてもお好きなのに、どうして不機嫌なのだろうか。

「分からないならいいのです。ですが、お茶菓子もつけなければ許しません」

ぷいと拗ねるような仕草をなさる姫様には、私は苦笑いをするしかない。ならば、機嫌を直していただくためには、清次様に頼まれていたあれを出すしかならう。

「では、桜の餅をお出しいたしましょう。斐太の棗が手に入りましたので、甘い餡を作ってみたのです。姫様も気に入って頂けると思いますよ」

私の言葉に姫様はお顔を桜の花のように華やがせた。やはり若い女性は恋話と甘味に弱いのだろう。

「まあ!! それでしたら、ここで頂きたいです! 華の終わりに花の前で桜を食すだなんて、なんて雅なんでしょう!」

普段はお淑やかな姫様も、今この時は年相応な童女のように喜んでゐる。

やはり、この年頃の少女には、感情の赴くままに喜び、笑い、幸せを感じて貰いたいものだ。

——いや、かつて出来なんだこと故、今度こそ護りたい、というべきか。

「榛葉？　どうかしましたか？」

……これはいけない。昔を思い出して今を後悔するなど、主に叱責されてしまます。それ以前に、姫様に心配をかけるなど、言語道断。

「いえ、盛華を愛でることで盛りに別れを告げることになるとは、いやはや儘ならないと思ひまして。ですが、姫様と楽しめるとなれば、それも安らぎましょう」

「あら、榛葉つたら歌人のようですね。歌合にでも出れば、都で有名になるのではないですか？」

私の誤魔化しの言葉に、姫様はくすりと微笑む。

「私などまだまだ。それよりも私はこの地で姫様がご成長なさる姿を見る方が楽しみです」

「……………そのような言葉、美夜殿等に言っていないでしょうね？」
何故そこで美夜様が出てくるのだろうか。

「まさか。私にとつてそのようなお方は姫様だけですよ」

私の様な不器用な男には、精々一人ずつしか護れない。いいえ、一人でも護りきるの

は難しいだろう。

だからこそ、私は姫様を全力で護るのだ。

「……もうっ!! この話はこれでおしまいです。早くお茶を淹れてきてちょうだい
!」

確かに無駄話が過ぎたようだ。これは今までで最高のお茶を淹れなければなるまい。

「畏まりました。それでは姫様は暫し桜を楽しみながらお待ち下さい」

「……少しくらい《清》と呼んでくれてもいいのに」

「? 何か仰有いましたか?」

「何でもありません!!」

女心とは何事よりも奇っ怪にして難儀なものである。これは幾百年も前から幾星霜の彼方までも変わらぬのだろう。